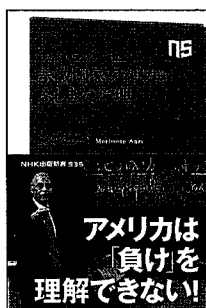


# 宗教国家アメリカのふしぎな論理

森本あんり 著



NHK 出版 (NHK 出版新書)  
2017年11月10日発行/205頁  
780円+税/ISBN 978-4-14-088535-2

## 主要目次

- 序 アメリカを解きほぐすカギは宗教にあり
- 1章 「富と成功」という福音
- 2章 「反知性主義」という伝統
- 3章 何がトランプ政権を生み出したのか
- 4章 ポピュリズムをめぐる三つの「なぜ」
- 終章 「正統」とは何か

## 著者紹介

もりもと あんり

1956年、神奈川県生まれ。国際基督教大学 (ICU) 学務副学長、同教授 (哲学・宗教学)。同大学人文科学科卒業。東京神学大学大学院を経て、プリンストン神学大学院博士課程修了 (Ph.D.)。専攻は組織神学。プリンストン神学大学客員教授、パークレー連合神学大学客員教授を経て、2012年より現職。著書に『アメリカ・キリスト教史 ― 理念によって建てられた国の軌跡』(新教出版社)、『反知性主義 ― アメリカが生んだ「熱病」の正体』(新潮社) など。

## in brief

米国民は、なぜドナルド・トランプを大統領に選んだのか？ アメリカに根づいた宗教性のあり方を読み解きつつ、トランプ現象の背景に迫る。

- 宗教は伝播<sup>てんぱ</sup>の過程で、その土地の文化に大きな影響をもたらす。それと同時に、宗教はその土地や文化に適応し、変化していく。この「土着化」のプロセスを経て、キリスト教はアメリカに根づき、独特の思考や論理を生み出した。
- 元来、聖書は、神と人間との関係は「片務契約」—— 神は人間が服従しなくても一方的に恵みを与えるものとした。だが、キリスト教がアメリカで土着化するにつれ、「双務契約<sup>そうむじやく</sup>」化する。すなわち、人間の義務は神に従うことで、神の義務は正しい者に祝福を与えることとされた。
- 「正しい者ならば、神の祝福を受ける」という双務契約の論理は、やがて逆転し、「神の祝福を受けているならば、正しい者だ」となる。これを基に、資本主義の精神が形成された。そして、アメリカで作られた福音が「富と成功」である。
- アメリカでは、宗教的な平等意識と富の福音は、「反知性主義」という伝統で結びついている。これは、例えばハーバード大学卒のエリートが牧師として重用されるといった、知性と権力の結びつきの固定化への反発を身上としている。
- 「富と成功」の福音と「反知性主義」。この2つの伝統を掛け合わせたところに、今回のトランプ現象がある。
  - ・ トランプは二度も離婚し、聖書にも疎いが、厳格な福音派に支持された。それは、彼が「成功者」と言われているから、きっと神も祝福している、と人々が考えたからだ。
  - ・ 選挙期間中、トランプは現在の政治や経済の中枢にいるエスタブリッシュメントへのアンチテーゼを訴えた。そして反知性主義の大衆駆動力を最大限に利用した。

## アメリカを解くカギは宗教にあり

トランプ新政権が誕生し、アメリカ政治の動向がきわめて予想しがたくなっている。

外交面に限っても、アメリカは今後も世界を牽引するパワーを維持できるのか、それとも一国主義を選択するのか。東アジアとの関係はどうなるのか。そのゆくえは、まさに予断を許さない。

本書では、かの国の現在を深層から把握するために宗教に注目する。というのも、アメリカ独特の思考や論理が形成される上で、「アメリカに土着化したキリスト教」という要素が決定的な役割を果たしているからだ。

### ●キリスト教の「土着化」

一般に宗教は、それぞれの土地に根づいて発展する際に「土着化」という変容のプロセスを経る。

このプロセスは、生体がインフルエンザなどのウイルスに感染した時のことを考えるとわかりやすい。ウイルスは宿主に受け入れられ、そこで繁殖してゆく過程で、宿主に大きな影響を及ぼすと同時に、自分自身をも変化させ、亜種を生む。

そのように自分を変化させることによって、ウイルスはいっそうよく宿主の生態環境に適応できるようになり、ますます自己繁殖してゆく。

宗教も同様だ。伝播の過程で、その土地の文化に大きな影響をもたらしつつ、同時に自らを変化させてゆく。これが「土着化」である。

キリスト教もアメリカという土壌に根づくうちに、強調点や視座を変えながら適応を繰り返してきた。その結果、ヨーロッパとおおもとの精神は同じでも、土地や文化に即して独自の現象形態が生み出されるようになったのである。

### ●片務契約から双務契約へ

もともと聖書には、神と人間との関係を「契約」の概念で理解する要素が含まれている。

この要素を特に強調したのはカルヴィニズム神学だが、その中心的なモチーフは「片務契約」、すなわち神は人間の不服従にもかかわらず一方的に恵みを与えてくれる存在である、という点だ。

ところが、キリスト教がアメリカで土着化する

につれ、次第にその強調点が転移して「双務契約」化する。双務とは、神と人間がお互いに契約履行の義務を負う、ということだ。すなわち、人間の義務は神に従うことであり、神の義務は人間に恵みを与えること、となるのだ。

神は、正しい者には祝福を与え、悪い者には罰を与える。因果応報の論理だ。するとどうなるか。ひとたび人間が義務を果たせば、今度は神が義務を果たす番になる。つまり、正しい者は神に祝福を強要する権利をもつ、ということになるのだ。

神学的に言えば、これはほとんど恩恵概念の破壊である。「恵み」は、無償で与えられるから恵みなのであって、双方向のギブ・アンド・テイクでは少しもありがたくない。それでもこの論理が順当に機能しているうちは、信仰も道徳も奨励されるので、特に深刻な問題にはならない。

### ●ヴェーバー理論はアメリカにこそ適合する

しかし、やがてこの論理は逆転する。「正しい者ならば、神の祝福を受ける」が、「神の祝福を受けているならば、正しい者だ」となるのだ。

この逆の推論を中核部分としているのが、マックス・ヴェーバーの理論——「プロテスタンティズムの倫理」が「資本主義の精神」を生み落とす、という理論である。

プロテスタンティズムの神学では、救いは絶対者である神の予定にかかっている。誰が救われるかは、あらかじめ決まっているのだ。だから、人間の行いが神の予定を左右できるものではないし、予定は人間の知り得るところでもない。

だが人間は、自分が救われるのかどうかを、どうしても知りたくなる。そのため、もし自分が救われる予定なら、自分はこの世でもまっとうな人生を送っているはずだ、と考えるようになる。

すると自分の生を振り返り、自分は救われる人間にふさわしいか否かを検証する態度が生まれる。こうして生活態度を禁欲的・合理的に吟味する精神が生まれ、それが資本主義の精神を形成するのに貢献した、というのがヴェーバーの筋書きだ。

彼のこの理論もまた、キリスト教がアメリカで土着化し、固有の発展を遂げたことと関わっている。

## ●「富と成功」の福音

その固有の発展の結果、作られた福音が「富と成功」である。

日本では、一代で成功した「成り上がり者」を見る目は冷たいが、アメリカは違う。自分の力で成功をつかむ成り上がりこそが、正しい成功の方法だ。それに必要なのは「機会の平等」だけだ。

トランプもそういった価値観の中で評価されている。自分で稼いだ金を使って自分の言いたいことを言うのなら、そのどこが悪いのか、と。

「富と成功」の福音を簡単に言えばこうなる。

「自分は成功した。神の祝福が伴わなければ、こんな幸運を得ることはできない。神が祝福してくれているのだから、自分は正しいのだ」

## ●トランプを支持した人々の背景

ただし、「富と成功」の論理は明らかに「勝ち組」の論理だ。自分の「勝ち」を説明するには役立つが、「負け」を説明することは難しい。

ほとんどの人は「自分はまっとうに生きてきた。なのにうまくいかない」と考える。原因は自分でなく、別のところにある、ということになる。

トランプを支持したラストベルト（米北東部に位置する「さびついた」工業地帯）の多くの人々は、貧困を背景に、ドラッグやアルコールなどによる失敗、家族の崩壊を経験している。でも、誰もその失敗を受け止めることができないでいる。

2016年の大統領選挙には、そういう人々の怒りが噴出した。工場が閉鎖し、街が崩壊する。「誰が悪いのか、オバマが悪い。オバマが石炭産業を潰したからだ」と悪者を仕立て上げる。

ラストベルトの人々だけではない。アメリカという国自体もまた、他の国々が経済力をつけてきたため、相対的な地位が低下している。だから人々は、「アメリカを再び偉大な国にする」と豪語する成功者のトランプになびいたのだ。

## 「反知性主義」という伝統

先に、「富と成功」の福音について説明したが、これについて不思議に思う人もいるかもしれない。

キリスト教は「神の前での平等」を主張している。しかし、先進国の中でアメリカほど格差が大きい国はない。「富と成功」という福音を受け入れた結果、アメリカでは「平等」という理念は姿を消してしまったのだろうか。

そうではない。実はアメリカでは、宗教的な平等意識と富の福音は、「反知性主義」という伝統で結びついているのだ。

日本で反知性主義というと、知性そのものを蔑視する態度と捉えられることが多い。だが本来は、知性と権力の結びつきが固定化することへの反発を身上とする。

例えば、ハーバード大学を卒業したエリートの牧師だけが幅をきかせる、極端な知性主義に対する反動である。つまり、「ハーバード大学」やそこに宿る知性そのものへの反発ではなく、ハーバード出身者のみが重用される「ハーバード主義」への反発から生じたものだ。

## ●チャーチとセクト

反知性主義と深く関わるものに、「チャーチ型」と「セクト型」という2つの集団概念がある。

「チャーチ」は、社会全体を覆うエスタブリッシュメントのグループ。人はその中で生まれ、特に所属感もなく、自然とそのメンバーになる。

それに対して「セクト」は、エスタブリッシュメントの宗教団体に対抗して、より純粋なグループを作ろうとする改革運動の担い手である。だからセクトは、既成の権力への根深い疑念と反発をもっている。この権力への疑念が、反知性主義に不断に養分を供給し続ける源泉なのだ。

例えば、大学の中にテニス部があるとする。そのテニス部は寛容で初心者でも入れるので、メンバーは自然と拡大していく。すると素人ばかり集まって、練習もままならず、試合にも勝てない。

そんな状況の中から、この大きなテニス部に嫌気がさし、厳しいトレーニングを積み、試合に勝ちたいと思う部員が現れる。そして、新しく強いもう1つのテニス部を作る。これがセクトだ。

従って、セクトの規範意識は非常に高い。理想のテニス部を作るのだから、入会基準も練習も厳

しい。明確な目的をもった、精鋭集団である。

### ●権力に対するアメリカ人の二律背反的な姿勢

アメリカは、様々なモノサシによって多数派と少数派が分かれている。だからチャーチ型とセクト型の対立も、いろいろな局面で見られる。

一方で人々は、国家や政府を地上における神の道具と見なし、楽観的で積極的な社会建設を志す。これはチャーチ型の精神である。

しかし他方では、地上の権力をすべて人間の罪のゆえにしかたなく存在する必要悪と考え、常にそれに対する見張りや警戒を怠らない。これがセクト型の精神である。

このセクト型の延長上に、アメリカの特徴である大きな政府や大きな権力への疑念や反発がある。

大方のアメリカ人は、政府というものが必要だ、ということまではしぶしぶ認める。町の広場で争いが起きれば保安官くらいは必要だろう。

でも、そうした権力は最小限でなければならぬし、本音を言えない方がいいに決まっている。これは銃規制、同性婚容認の問題など、近年の論争のいずれにも通底する考えだ。ここに、権力に対するアメリカ人の二律背反的な基本姿勢がある。

アメリカは、出発点において、旧世界を批判して、新国家を作るという気概に満ちていた国だ。その意味では、アメリカそのものに、旧世界であるヨーロッパに対するセクト型精神がビルトインされているわけだ。そしてそれは、宗教的な情熱や確信と密接不可分のものである。

## 何がトランプ政権を生み出したのか

「富と成功」の福音と「反知性主義」という、アメリカ的精神を特徴づける2つの伝統。この両者を掛け合わせたところに、トランプ現象がある。

### ●なぜ福音派はトランプを支持したのか

例えば、なぜトランプは福音派に支持されるのか、という謎がある。

常識的に考えれば、聖書の字義通りの解釈を旨とする福音派が彼を支持するとは思えない。

トランプは二度も離婚して、三度目の結婚をし

ている。「聖書は好きな本だ」と言いながら、「では、聖書のどこが好きですか」と記者に尋ねられると、まったく答えられない。

こうした言動を見る限り、彼はとてもキリスト教的な人間とは言えないだろう。だが、得票率を分析すると白人福音派の8割が彼を支持したという結果が出ていた。それはなぜか。

その答えが、「富と成功」の福音である。

アメリカに「土着化」した結果、キリスト教は世俗化して、自己礼賛的な論理にすり替わった。キリスト教自体には、国家を超越して現世を批判するような側面がもちろんある。ところがアメリカのキリスト教は、そういう現世批判的な部分を次々にそぎ落としていって、徹底的に楽観的で自己肯定的な宗教に変質してしまったのだ。

富と成功の論理からすると、トランプは確かに「成功者」と言われているから、きっと神が祝福しているに違いない、という理屈になるのだ。

### ●知性があっても大統領にはなれない

トランプは選挙期間中、反知性主義の大衆駆動力を最大限に利用した。彼の言動は、反ワシントンで反ウォールストリート、つまり現在の政治や経済の中枢にいるエスタブリッシュメントへのアンチテーゼという点で一貫している。

こうした反知性主義の系譜につらなる大統領は、アメリカの歴史を見るとトランプだけではない。そもそもアメリカの大統領に選ばれるのは、必ずしも知性にあふれた人物というわけではない。というよりも、見るからに知性的なエリートは、逆にあまり好まれない。

ジョージ・W・ブッシュが勝った2000年の大統領選が、そのことをよく表している。彼は、語彙が貧弱でしばしば笑われたが、対立候補のアル・ゴアは、ハーバード出の秀才である。

でも結局、人々が選んだのはブッシュだった。「頭のいいやつと一緒にいると何か窮屈だ。でも、ブッシュならビールを片手に座って気楽に話せる相手だ」と見なされたのである。

アメリカの知識階級と民衆の間には、巨大で不健全な断絶があるということだ。